ありのままで、いっしょに学び、育ちあう

こどもと。

4

VOL.1
2025 APRIL

国立市幼児教育センター
こどもラボ

未来をつくる

特集

「こどもと。」創刊号特別インタビュー
オーガニックな保育へ

いま、ここから

「凸凹」は、あなたにどう見えていますか？

まなびのたね

2025年度
国立市幼児教育センター
研修案内

未来をつくる

「こどもと。」創刊号特別インタビュー

オーガニックな保育へ

「保育」は子どもの今と未来の幸せ、そして誰もが幸せに生きられる社会の土台をつくる最も大切な教育です。「保育」にとってほんとうに大切なことをどこまでも探究し対話し共有していくため、「こどもと。」を創刊します。創刊号の特集は、国立市幼児教育センターを運営する「社会福祉法人くにたち子どもの夢・未来事業団」の汐見稔幸理事長のインタビューをお届けします。日本の保育学・教育学の第一人者である汐見理事長に、そもそも保育とは何か、保育者の専門性とは何かという根本的な問いをあらためて聞いてみました。

・聞き手／細田 直哉（国立市幼児教育センター長）　・編集協力／太田 美由紀

Q.1 「保育」とは、何でしょうか？

「保育」は、英語ではデイ・ナーサリー【day nursery】と言います。動詞の【nurse】の語源には「授乳する、食べ物や飲み物を与える、育てる、成長や活力を促す、励ます」という意味があります。子どもの命をていねいに育んでいくという意味が込められているのです。つまり保育は、子どもが自分だけで生きていく力を十全に手に入れる前に、周りの大人ができるだけていねいに関わりながら命を育んでいく営みであるといえます。そして同時に、両親だけでなく、その子の身近にいる大人がお母さんやお父さんからの委託を受けて、ていねいに親代わりをしながら、親よりも高い専門性を持って子どもと幸せな生活をつくりだしていくことでもあります。

それは、一生続くさまざまな学びのための土台づくりです。学ぶというのはこんなに楽しいことだという体験をたくさんしてほしい。「頭だけでなく体全体で学ぶこと」を学ぶ、最も重要な原体験をする時期でもあります。ですから、学校教育をモデルにその練習をさせることとはまったく違うのです。命をどうやって育み、輝かせていくか。脳でいえば記憶や読み書きや計算などをつかさどる表面の部分よりももっと奥深い部分にある、命をつかさどるところを育てるわけです。「人間らしさ」とは何かについて、一番深いところから考えなければならない営みでもあります。

とはいえ、「人間らしさ」とは何かについて、大人が正解を知っているわけではありません。だからこそ、大人たちは、人間の可能性をまるごと持っている子どもとともに生きること、そして、一人ひとりちがう子どもの声をリスペクトして聴くことが大切なのです。目の前の命を輝かせるためにどんな環境や関わりが必要なのか、子どもの姿に応答しながら、一人ひとりの多様な声を聴いていきます。そうすれば、言葉

をもたない0歳の子どもとも対話することができます。

そんなふうにして、人間らしく生きられる豊かな生活を子どもとともにつくりつづけていくこと。それも保育の大切な営みです。つまり保育とは、一人ひとりの子どもの命を輝かせながら、それと同時に、人間らしい生き方ができる新たな世界を、子どもとともに園の中からつくり出し、一人ひとりの幸せな人生とよりよい社会の土台を築いていくもっとも大切な教育であると言えるでしょう。

Q.2 乳幼児期に育むべきことは?

乳幼児期について次のように定義したいと私は考えています。

さまざまな体の機能や、外界を知るための感覚機能である五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）、さらに、第六感と呼ばれるものも含めて、できるだけ豊かに活性化していくための最も大事な時期である、と。第六感にはインスピレーションや直感も含まれます。なんとなく怖い、嫌な予感がする、この人は仲良くなれそうだ、など、皆さんも普段の生活で感じているはずです。私たちは、頭で複雑に思考している以上に、これらの感覚機能をアンテナのように働かせながら、常に瞬間的に情報処理をしています。

たとえば、「テレビで紅葉した山を見る」と「紅葉した山を実際に歩く」、この二つの行動は全く異なる体験です。テレビでは視覚的に色が美しいことはわかりますが、それ以上の情報は感知できません。しかしその場所を実際に歩いてみると、すべての感覚機能が働きます。風の冷たさや日差しの暖かさを肌で感じ、揺れる木漏れ日の美しさに包まれながら、落ち葉を踏む音が聞こえ、さまざまな匂いなどが体全体に入ってきます。「滑るからゆっくり歩こう」とそろりそろりと足を踏み出したり、美しい色の落ち葉を触ってみたりすることもできる。すると、興味関心や好奇心が動き出します。赤い葉が落ちていた場所の苔の色との対比を発見することもあるでしょう。ありとあらゆる偶然に彩られた世界を、全身で、五感で感じるのです。

現在の人間の住む世界、特に都会では、効率が重視され、ほとんどが直線に整えられています。しかし、自然の中ではすべてが曲線で、でこぼこしている。自然と自然、自然と生き物の相互作用から生み出された形は、基本的には曲線です。自然の中でずっと暮らしていると、直線が多い街に行くと「すごい」という驚きがあるかもしれませんし、逆に「怖い」と思うかもしれません。「落ち着かない」人もいるでしょう。そのような感性が、人間の生命機能をベースにした感じ方なのだと思います。

人間の遺伝子には、自然の中で20万年暮らしてきた人類の情報がインプットされています。自然が作り出す曲線を見ているとホッとするような、生命機能が安心を感じる気持ちを、やがて「美」と名づけたのではないだろうかと私は思うのです。

今の社会は、人工的な世界が増えすぎています。人工的な世界は、人間のつくった情報によってつくられています。それが悪いわけではありませんが、人間が直接自然と触れ合い、五感が活性化され、自然とコミュニケーションをとりながら「自分が生まれたのはどのような世界なのか」を獲得していく機会が減少している状態です。誰かがつくった情報をネットやテレビで見ているだけでは、自分の生命機能が働かない人間になってしまうのではないかと危惧しています。

これからは、自動車を自分で運転する時代は終わり、料理もロボットが全部やってくれるようになるかもしれません。ロボットが育児をするかもしれない。ある意味では便利な世の中になっていきますが、すべてを機械に任せることが、果たして「人間にとっての本当の幸せ」につながるのか。そのことを、真剣に考えなければいけない時代なのだと思います。

社会福祉法人
くにたち子どもの夢・未来事業団
理事長　汐見 稔幸

東京大学名誉教授、白梅学園大学・白梅学園短期大学名誉学長。日本保育学会会長、全国保育士養成協議会会長などを歴任。保護者のためのエコカレッジぐうたら村村長。
専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学。

Q.3 「保育者の専門性」とは何ですか？

保育者の専門性として、まず、子どもの命に対する強いリスペクトを持っていることをあげたいと思います。子どもは100人いれば100通りです。成長や発達もみんな違います。興味関心を持つことも、好きな絵本もみんな違う。その一人ひとりの子どもが、大好きなものを見つけてその世界を大事にしながら自己実現の旅を始めてみたいと思えるように、そしてそれが動き出すように応援するのが保育者です。

しかし、保育者や先生も人間ですから、こういうタイプの人は好きだけど、こういうタイプの人はちょっと苦手ということもあるかもしれません。ただ、たとえ少し苦手なタイプがあるとしても、その子のいいところを見つけるのが上手な人もいます。保育をする人間は、その子の癖や、人間性、傾向性などに対して主観的な価値判断で決めつけず、とらわれず、日々のその子を見てほしい。子どもたちは、「先生は僕のことをダメな子だと思っている」「私のことを全然見てない」などとすぐに感じとります。子どもを見るまなざしを日々アップデートできることもまた、専門性の一つと言えそうです。

現場では、できる限り多く振り返りをして、保育者や先生同士で対話や議論を重ねてみてくださいとお伝えしています。それぞれが気づいた子どもたちの様子を共有することで、子どものさまざまな面を発見できます。それは、自分の視点とは異なる子どもの見方を学ぶことにもなります。

そもそも人間は一人では生きていけないので社会をつくって生きています。しかし、社会が大きくなりすぎると、その社会を統合するためにおかしな論理が出てくることがあります。大きすぎる社会において拠りどころを失い、不安に耐えられなくなった人たちが、自分の頭で考えることをやめてしまい、残虐な行為にも疑問を持たず、気付かないうちに誘導されてしまう。これこそが哲学者のハンナ・アーレントが著書『全体主義の起源』で、ナチスドイツやスターリン時代のソ連（現在のロシア）が陥ったと指摘している事態であり、まさに今、世界各地で起きていることです。

だからこそ、お互いに顔が見える小さな規模で議論を重ねて、社会やコミュニティをつくっていくことがとても大切なのです。各園で、みんなが幸せなコミュニティにするにはどうすればいいかを議論し、上手に制度を変えていける園であってほしいと思います。

18世紀の哲学者ルソーは教育論としての『エミール』と社会制度論としての『社会契約論』を同時期に書いています。それは教育によって自分の頭で考え、判断できる人間を育て、その人たちが個人を超えてよりよい社会をつくるために議論し、社会を変えていくことを願ったからです。それを現代の園に置き換えてみるとどうでしょうか。保育者自身がお互いを尊重しながら議論し、園というコミュニティをつくっていくこと、そして、多様な子どもたちがお互いを尊重し、それぞれの命が輝く魅力的なコミュニティをつくるプロセスを支えること、それが保育者の専門性として求められる時代になってきていると思います。

Q.4 保育者のみなさんにメッセージをお願いします。

実は皆さんは、どんな環境にいても毎日「自然」と向き合っています。子どもの命、それこそが一番身近な「自然」だからです。子どもの命と向き合うときに、効率や社会の規範、こうあるべきなど直線的なモノサシだけでみていると、そこにおさまりきらない子どもが出てきたとき、その子を排除したくなるような感情の動きが出てくるかもしれません。

しかし、子どもが直線的なモノサシにおさまりきらないのは当然です。子どもの命は「自然」ですから、人工物のように効率よくまっすぐで、扱いやすいはずがありません。そもそも曲がっていたり、でこぼこしたりしているものであり、それこそが自然なのです。

だから、クラスで困ったこと、予測できないことが起こったときにも、その子に問題があると考えるのではなく、その子の「自然」を生かしきれていないクラス・園・社会の枠組みが窮屈すぎるのかもしれない、環境に問題があるのかもしれないという方向で考えてみてほしいのです。一人ひとりの子どもの自然が、多様なままつながり、互いに生かしあえる「オーガニック（有機的）なつながり」をつくることができれば、すべての子どもが自分らしく輝けるコミュニティが生まれるからです。

先日見学したある園では、障害のある子もない子も一緒に過ごしていて、誰が障害があるのかもわからないほどでした。ゆっくり行動する子も、活動的な子もいましたが、そこには多様な存在が多様なままつながり、生かしあう「オーガニック（有機的）な秩序」が創り出されていました。

その園の理事長は、インドを訪れたときの話をしてくれました。インドでは普通の道路を牛がゆっくりと歩いているそうです。牛が道路を歩いていたら、どうするでしょうか。インドでは人が運転する車のほうが止まってそれを待ちます。道路には牛の糞が落ちていて、そのすぐ横で子どもたちが群れて遊んでいるそうです。混沌としか言いようがない状況ですが、そのような場所でも、それぞれがお互いをリスペクトして存在していたと話してくれました。だからインドは面白く、エネルギーがあるのでしょう。

人間には元来、そのような混沌を上手に秩序に変えていく力が備わっています。ですから、子どもの中にあるそのような力を発揮できるように、保育者には、一人ひとり違う多様な人々が幸せになれる暮らしとは、そして社会とはどういうものなのかを子どもたちと一緒に考え、共に創り出していってほしいと願います。

Q.5 国立市幼児教育センターに求めることは？

国立市は、すべての人が支え合い、共に生きる「ソーシャル・インクルージョン」を理念として掲げています。多様な人が互いの違いをリスペクトしながらオーガニック（有機的）につながり合って新しい価値を創り出し、正解がない世界の中でよりよく共に生きることを創り出す。そのような挑戦を絶えず続ける街を目指しているということです。

昨今、世界、特にヨーロッパで最も大事だとされているのは、大学をはじめとする高等教育でも中等教育でもなく、保育や幼児教育です。自然に非認知的能力が育たなくなってしまった時代において、意識的に非認知的能力を育てる必要が出てきたからです。非認知的能力は、何らかのカリキュラム通りに育てられるものではありませんから、乳幼児期にこそしっかりと育てる必要があります。幼児教育に関わる皆さんが行っている広い意味での教育が、社会の中で最も大事な教育だと言われているわけですから、そのような仕事をしていることに誇りと自覚を持っていただければと思います。

幼稚園・保育園・こども園、そしてもちろん子ども自身の意見が国立市にしっかりと届くことを願っています。幼児教育センターも、監査をするような役割ではなく、困った時に相談に行けば一緒に考えられる場所にしたいとセンター長が話していました。ぜひ保育者や先生たちのよろず相談センターになってください。これからを大いに期待しています。

いま、ここから

「凸凹」は、あなたにどう見えていますか？

細田 直哉（国立市幼児教育センター長）

インタビューの中で汐見先生は、子どもの命は一番身近な「自然」であると語っています。「自然」はまっすぐではなく、でこぼこ。そんな、でこぼこした子どもの命が輝くような人間らしい暮らしをつくることが「保育」である、と。

けれども、同じ子どもの姿を見ても、その輝きが見える人と見えない人がいるように思います。どうしてそのようなことが起こるのでしょうか？

たとえば、「凸凹」という文字を例に考えてみましょう。「凸凹」という文字はあなたにはどう見えていますか？　たぶん、でっぱっている「凸」とへこんでいる「凹」の組み合わせとして見えていると思います。

でも、別の見方はできないでしょうか。たとえば、「ないもの」ではなく「あるもの」に注目してみましょう。すると、「凹」という字は「へこんでいる」のではなく「でっぱりが2つもある」ものとして見えてこないでしょうか。

このとき、変わったのは何でしょうか？　文字そのものは何も変わっていません。変わったのはこちらの「見方」です。見方が変われば、対象は変わらなくとも、その価値が変わります。今まで「ないもの」として見えていたものが、「あるもの」として見え、その「あるもの」をどう生かしていくかという視点で考えられるようになります。

子どもを見るときも同じではないでしょうか。子どもの命は「自然」ですから、まっすぐではなく、凸凹があります。そんな凸凹な子どもを見るとき、直線から構成された人工的な「□」を基準として見れば、「凸」はでっぱって、「凹」はへこんで見えるでしょう。これまでの教育は、そんな凸凹な子どもたちの「でっぱり」を削りとり、「へこみ」を埋めて、すべての子どもを均質な「□」に近づけることを目指してきました。そして、そんな子どもたちを四角いタイルのように敷き詰め、ひとりもはみ出さないような集団をつくれることが教育の成果であると考えられてきたのではないでしょうか。

いまや不登校の子どもの数は過去最多の34万人、子どもの自殺者数も過去最多の527人（原因は学校問題が最多）です。子どもの命の輝きが消えかけようとしています。

希望はどこにあるのでしょうか？　目の前にある子どもの命。それこそが希望です。その命（LIFE）が輝くように、子どもの声を聴きながら、私たちの暮らし（LIFE）を変えていくこと。子どもたちが社会に合わせるのではなく、子どもたちと共にもっと人間らしく輝ける社会と教育をつくること。それをまずは園からはじめてみること。そして、家庭とつながり、学校とつながり、地域とつながり、保育から世界を変えていくこと。

それは子どもたちの命を輝かせるだけでなく、私たち大人の命をも輝かせるワクワクする探究と挑戦の過程になるはずです。LIFE（命＝暮らし）が輝く世界へ、子どもと共に。

まなびのたね

2025年度国立市幼児教育センター研修案内
～保育の専門性を高めるために～

こどもラボでは、今年度もたくさんの学びの機会を用意しています。
これからの保育のあり方を考え、専門性を深めてみませんか?
詳細は、こどもラボのホームページにて順次ご案内していく予定です。
皆さまのご参加、お待ちしています。

こどもラボHP

国立市内の幼稚園・保育園・こども園などにお勤めの方へ

市内各園からの声に応え、今、現場で必要とされている研修を企画しました。

保育の基本から最新の情報まで、また、個人の専門性向上から組織づくりまで、幅広い内容を各分野の第一人者の講師と共に学びませんか?

国立市内の幼稚園・保育園・こども園・発達支援施設など幼児教育関連施設で勤務している方は無料で受講できます。

※定員に余裕がある場合、市外の上記施設に勤務している方も有料で受講可能となる場合があります。

「保育の基本」をあらためて学ぶ

「子どもへのまなざし」と「保護者支援」

日時　4/18(金)18:00～20:00

講師　井桁 容子(コドモノミカタ 代表・元東京家政大学ナースリールーム 主任保育士)

保育の専門性は「まなざし」から始まります。温かい井桁先生の語りを通して、子どもの姿を見ることで「人間」としての素晴らしさが見え、明日からの保育がもっと楽しみになります。年度のはじめに、保育の一番大切なことを確認し、今年の保育に生かしましょう!

「子どもとの関わり」の専門性を高める

保育の専門性に基づいた、子どもとの関わり

日時　5/9(金)18:00～20:00

講師　高山 静子(元東洋大学 教授)

子どもとの関わり方の基本を学び、関わり方の質を高めることで保育の質が向上します。講師はこの分野の第一人者『保育者の関わりの理論と実践:保育の専門性に基づいて』の著者の高山先生です。園全体で受講することで研修効果がより高まります。

「子ども理解」を職場のチームづくりに生かす

保育者のための「虹色」ワークショップ:多様性の理解を職場づくりに生かす!

日時　5/16(金)18:00～20:00

講師　星山 麻木(明星大学 教授)

子どもはホワイトでもブラックでもグレーでもなく、一人ひとりが豊かな虹色、それは大人である私たちも同じです。人間の特性を7色で紹介し、自分の色を見つける「虹色のワーク」で、自分の素敵なところ、人と違うところを見つけてみませんか?自分を理解することで、子どもや保護者、職員同士の考え方の違いや行動への理解が深まります。

「発達支援」の専門性を高める

藤原里美の子ども発達サロン

日時　5/30(金)・6/27(金)・7/25(金)・9/26(金)18:00～20:00

講師　藤原 里美(チャイルドフッド・ラボ 所長)

「子ども発達サロン」は、オフラインのYoutubeチャンネル「藤原里美の発達支援ルーム」のような場。保育者からの質問をベースに、多様な子どもたちの発達を支える具体的な支援方法や環境づくりをみんなで楽しく学び合える場です。

「笑顔で働ける職場」をつくる

保育の質を高め、笑顔で働ける職場をつくる園内研修のコツ

日時　録画配信(約2時間:6月以降を予定)

講師　矢藤 誠慈郎(和洋女子大学 教授)

時間に余裕がない保育者・園でもできる園内研修のコツを学べます。園内研修の方法を学び、実際にワークに取り組むことで、保育の質を高め、笑顔で働ける職場をつくりましょう。講師は、この分野の第一人者で『園内研修を通じた保育の変革A to Z:保育の質の向上に役立つ32のコツ』の著者の矢藤先生です。

「あそび」の専門性を高める

遊びながら、遊びを学ぶ研修①子どもとつくる運動遊び

日時　7月以降を予定

講師　堀内 亮輔(東京女子体育大学 講師)

子どもに「させる」運動遊びではなく、子どもと楽しみながら「つくる」運動遊びのコツを学びませんか? NHK「おかあさんといっしょ」の運動遊びの監修もしている堀内先生と楽しく遊んでいるうちに運動遊びの基本が自然に身につく研修です。

「保育の知識」をアップデートする

最新の科学をもとに、より良い保育をつくる(仮題)

日時　2/27(金)18:00～20:00(オンライン研修)

講師　掛札 逸美(保育の安全研究・教育センター)

昭和の保育の「常識」は、最新の科学では「非常識」!? 子どもの安全と育ちを保障するには、最新の科学に基づき、保育をアップデートする必要があります。『21世紀の証拠に基づく、「子ども育て」の本』の掛札先生の研修で保育の知識をアップデートしましょう。

保育園等にお勤めの方へ～保育士等キャリアアップ研修～

こどもラボのキャリアアップ研修は、保育の専門性を高められるだけでなく、現場の保育が変わる「たね」が見つかる研修です。東京都の制度に基づく受講対象者は無料で受講できます（対象者以外の方も有料で受講可）。

キャリアアップ研修「乳児保育」

日時　7/25（金）・9/12（金）・10/3（金）・10/30（木）・12/5（金）
14:00～17:00

講師　岩田 恵子（玉川大学 教授）
上田 よう子（玉川大学 講師）

乳児保育の実践力だけでなく、リーダーとなる力を育むため、現場で使えるさまざまな手法を体験し、実際に現場で応用し、その成果から共に学び合う往還型研修です。

キャリアアップ研修「幼児教育」

日時　5/30（金）・7/18（金）・9/19（金）・11/8日（土）・12/2（火）
14:00～17:00

講師　松山 洋平（和泉短期大学 教授）
浅見 佳子（相模女子大学 准教授）

幼児教育のリーダーとして保育の質を高めつつ、チームをまとめる手法を実践的に学びます。学んだことを現場で実践し、互いの実践からも学べる往還型研修です。

キャリアアップ研修「障害児保育」

日時　10/24（金）・11/26（水）・12/19（金）13:00～17:00
1/23（金）13:00～16:00

講師　藤原 里美（チャイルドフッド・ラボ 所長）

YouTubeで大人気の藤原先生の障害児保育の研修はまさに「目からウロコ」。子どもの行動の意味がわかり、発達を支援する実践力が身につく実践的な研修です。

キャリアアップ研修「保護者支援・子育て支援」

日時　6/22（日）・7/20（日）・8/11（月）
10:00～16:00

講師　亀﨑 美沙子（日本社会事業大学 准教授）

保護者の子育てを支え、子育てしやすい地域をつくるための原理を学び、多様なワークに取り組むことで、保護者支援・子育て支援の実践力を身につけられる研修です。

キャリアアップ研修「マネジメント」

日時　5/16日（金）・6/13（金）・7/31（木）・9/11（木）・10/20（月）
14:00～17:00

講師　大豆生田 啓友（玉川大学 教授）
髙嶋 景子（聖心女子大学 教授）
三谷 大紀（関東学院大学 准教授）

子どもも大人もワクワクしながら園・家庭・地域がつながり、保育から世界が変わる。それが保育のマネジメント!? 研修をヒントに現場でチャレンジ。保育がもっと楽しくなり、学び合う仲間もでき、現場が変わる楽しい往還型研修です。

キャリアアップ研修「保健衛生・安全対策」

日時　2/5（木）・2/12（木）・2/19（木）
10:00～16:30（オンライン研修）

講師　掛札 逸美（保育の安全研究・教育センター）
並木 由美江（聖学院大学 非常勤講師・元全国保育園保健師看護師連絡会 会長）

この分野の第一人者である掛札先生と並木先生の最強コンビが講師。子どもの命と育ちを守るために現場でできることが明快に理解でき、実践力も身につく研修です。

こどもラボNEWS

こどもラボのロゴマークを作成しました

国立市幼児教育センター
こどもラボ

このロゴマークには、こどもラボが大切にしていること、伝えたいメッセージを込めました。末永く愛されることを願って、ロゴに込めた思いを紹介します。

こどもラボは、乳幼児期の子どもたちに豊かな環境を整えることで、子どもの自ら育つ力が発揮され、自分らしく幸せに生き、育ち合えるようにしていきたいと考えています。そして、そのような環境を整えることで、多様な存在が多様なままつながり合い、誰もが幸せに生きられる社会の土台を築いていくことをめざしています。

ロゴでは、一人ひとりの子どもが個性を伸ばし、育ち合うそのようなプロセスを、大地と一体になった力強い「根」と、そこから勢いよく伸びる「幹」、自由に広がり、響き合う多様な色の「実」と「葉」によって表現しています。幼児教育とは、子どもたちが今を最もよく生き、生涯にわたる幸せの土台となるこの「根」の部分を力強く育てる営みなのです。

ところで、このロゴマークの中には、「国立市」と「こども」に共通する頭文字「K」が隠されています。どこにあるかわかりますか?

国立市幼児教育センター通信
こどもと。VOL.1
2025年4月号（年3回発行）

編集・発行
国立市幼児教育センター　こどもラボ
（運営　社会福祉法人くにたち子どもの夢・未来事業団）
〒186-0003　国立市富士見台4-17-65（矢川プラス内）
TEL 042-505-6532

こどもラボHP　Instagram　X（旧Twitter）